

急に涼しくなつて、読書の秋。先月は例会の替わりに紀州路の太平記ゆかりの地、田辺・湯浅の旅を楽しみました。そういうわけで、久しぶりに開いた太平記は第十一巻。鎌倉幕府の滅亡を待たず船上山を出た後醍醐天皇が兵庫でその報を得、意気揚々と京の都に帰還します。対照的に各地で繰り広げられた敗者、北条一族の悲話。太平記も平家物語風の美文調で、盛者の必滅の理を語ります。以下が輪読箇所でした。

(二) 千種頭中将殿早馬を船上に進せらるる事

後醍醐天皇、京へ (P171～173)

早馬で六波羅の滅亡を知った船上山の後醍醐方では、還幸時期について近臣たちが慎重論を唱えていた。天皇は自ら筮竹をとって占い、六十四卦の「師」の卦を得た。易経などを参照して「吉」と判断、山を下って出雲路を京に向かう。佐々木高貞、名和長年ら船上山に馳せ付けていた出雲、伯耆の武士たちがござって供奉した。

(三) 書写山行幸の事

開山上人の遺品に感動 (P174～176)

後醍醐一行は姫路に近づき、西の叡山と称される書写山円教寺に立ち寄る。超能力で知られる開山性空上人ゆかりの宝物を見せられて上機嫌の天皇は、播磨の荘園室安郷を寄進した。

(四) 新田殿の注進到来の事 (五) 正成兵庫に参る事

(六) 還幸の事

天皇、二条富小路内裏に帰還 (P176～180)

兵庫の福厳寺に逗留中、新田義貞から鎌倉幕府打倒の注進が到着し、天皇一行は歓喜した。さらに千早赤坂城で幕府軍の猛攻に耐え抜いた楠正成も参上。彼を先頭とする武士、官人に守られて入京し、まず、東寺に入る。次の日、出迎えた千種忠顕、足利尊氏、同直義らの大物を加えた壮麗な行列で、御所の富小路内裏に帰還した。

(七) 筑紫合戦九州探題の事

菊池一族、鎮西探題襲撃で討死 (180～185)

後醍醐がまだ船上山に居たころ、九州の有力氏族、少弐、大友、菊池三氏が博多の鎮西探題襲撃を計画。まず、菊池の惣領武時が出陣し、少弐、大友を誘ったが裏切られた。後に引けない武時は、長男武重を本拠の肥後国に

返し、一族単独で探題を襲い、総員討死した。このあと六波羅の滅亡を知った少弐、大友両氏は後醍醐側に寝返って探題北条英時を襲撃、鎮西探題を滅ぼした。

※物狂いした新妻 鎮西探題は討死した菊池一族の首を犬射馬場にさらした。それを見に行つた菊池武時の次男頼隆の妻が発狂。二人の僧が宿を訪ねると、妻は男の様で僧を迎えた。そして「自分は菊池頼隆だ」と名乗り、妻と辛い別れをして出陣したが、敵を討たず死んだので無念・・・などと、哀傷の面で涙ながらに語った。僧は求めに応じて水を与え、卒塔婆を立てる約束をして慰めたという。僧たちの体験を聞いた京都・東福寺の僧が書き残した悲痛な実話である。(正慶乱離志・博多日記)

(八) 長門探題の事

降参、赦免、病死 (P188～191)

長門探題北条時直は鎮西探題の滅亡を知って降参、当時、九州の政務を預かっていた後醍醐の外戚、峯僧正のとりなしで、赦免されたが、間もなく病死した。

(九) 筑前牛原地頭自害の事

妻子を淵に沈ませ自害 (P191～195)

越前に出陣していた北条時治は、妻子を現大野市内の川淵に身投げさせたあと、自害して果てた。

(十一) 金剛山の寄手ども誅せらるる事

楠攻めの敗將を阿弥陀峯で処刑 (P201～209)

千早赤坂城を囲んでいた幕府軍の将兵は、いったん奈良・般若寺周辺に集結、出家姿で京都に護送されたのち阿弥陀峯で処刑された。二階堂道蘊は賢才を買われ、一時、建武新政に登用されたが、陰謀を疑われ斬られた。

第13巻輪読予定ページ (12月16日)

- | | | | | |
|-----|-----|----------|-----|----------|
| (1) | 293 | 暫くあつて～ | 298 | おはしける |
| | | (293その故～ | 294 | 耳にあり、略) |
| (2) | 300 | 御神拝一日～ | 303 | 給ひけれ |
| (3) | 305 | 故相模入道の～ | 307 | 調へられける |
| (4) | 307 | すでに～ | 311 | 帰りけり |
| (5) | 311 | 大納言殿をば～ | 315 | 生まれさせ給へり |
| (6) | 321 | 今、天下一統～ | 326 | 給ひける |
| (7) | 333 | 直義朝臣～ | 335 | なされける |
| (8) | 335 | 尊氏卿～ | 338 | 引き退く |
| (9) | 338 | この山は～ | 341 | 出で来にけれ |